

日本の森と文化と ～3000年の森の彼方へ

法隆寺の金堂と五重塔が現存する世界最古の木造建築物であることはご存知の方も多いだろう。7世紀後半から8世紀初頭にかけて再建され1300年以上を経た今日まで寺院として利用され続けており、1993年に世界遺産(文化遺産)に登録された。

昭和の大修理に棟梁として携わった故西岡常一氏が「1300年前に法隆寺を建てた飛鳥の工人の技術に現代は追いつけない」と述べているとおり、当時の木造建築技術は1300年以上の耐久性を実証している。奈良国立文化財研究所の調査では、この建物には樹齢400～1000年の桧が使われており、630～640年頃に伐採されたことが明らかになっている。

法隆寺が建立されるずっと以前の縄文時代から弥生時代に、この地の森林にぼつんと落ちた桧の種子が芽吹き、数百年～千年の風雪に耐えて生き残ってきた。法隆寺を建立する7世紀に、樹齢500年、1000年の桧がこの近隣地にあり、その大木を伐り出し、運搬し、加工し、大きな建物に組み上げる技術があり、それを担うさまざまな工程を受け持つ職人がいたからこそ法隆寺は建立された。そして数十年に一度の小修理、200年に一度の大修理を行って今日まで建築物として利用されている。

はたして、現代に生きる私たちがこれから1000年先の子供たちに法隆寺を残していくことができるだろうか？

日本は北欧と並ぶ先進国の中でトップクラスの森林国である。世界の文明は森林の消滅とともに滅亡したが、私たち日本人は縄文時代から森と共に暮らし、木材や食料、燃料、肥料など多くの恵みを森から得るとともに心のよりどころとして日本文化を熟成してきた。豊かな森を維持しながら、その恵みをインフラ整備や生活に利用する技術とルールを長年にわたって伝承してきた日本の文化は“木の文化”である。収穫(伐採)→更新(造林)→保育→成林→収穫というサイクルを何千年も繰り返し、現在の森林を維持している。

もっとも、日本にも森林荒廃の危機は有史以来これまで三度あった。一度目は奈良に都を建設した飛鳥・奈良時代、二度目は各地で城郭が建設された戦国時代、三度目は日中戦争から第2次世界大戦敗戦までの木材統制時代とその後の復興期

に過大な伐採が行われた。しかし、それぞれの時代、森林を回復し今日まで維持してきた。縄文時代から森と共に育んできた“森の文化”のDNAがそうさせたのだろう。

そして今、四度目の森林荒廃の危機を迎えている。今回の危機はこれまでの危機とは違い過大伐採ではない。

1980年をピークに森林所有者の所得となる立木価格が下落を続け10分の1になってしまった。現在生産されているスギ1m³の立木価格が2,465円である。一般的なスギ人工林50年生1haの伐採・販売経費を差し引いた林家の手取り収入が100万円に満たない。現在、人工林を成林させるまでにかかる造林・育林費用は250万円程度であり、これに最大68%の補助金が利用できるが、それでも、戦後、融資・補助政策で造成してきた1,000万haの人工林の大半が採算性を失っている。日本の森林蓄積は有史以来最高の50億m³近くまで増え、毎年、国内消費を上回る8,600万m³の森林成長があるにもかかわらず、1,700万m³しか生産されていない。多くの林家は育林投資を続けられず、間伐などの手入れ不足森林や保全管理が行われない放置林が増大し人工林の荒廃が進行しているのである。

この大きな原因には、1950年代に政府がすすめた木材資源利用合理化方策(土木分野での鋼材・コンクリートへの代替、燃料のガス等への転換、防火地域の拡大による木造禁止・不燃化など)や木材輸入関税撤廃と大型外材工場の建設促進などの輸入拡大策により、それまでの国産材マーケットの制限と新たな外材マーケットの拡大を進めたことがある。そしてプラザ合意による円高がとどめを刺した。

このほど政府は、公共建築等木材利用促進法や再エネ法により国産材の建築、燃料分野での利用拡大へと半世紀前の政策を180度転換した。そして土木学会が木材利用推進決議を行った。経済界でもJAPICが「林業復活・森林再生を推進する国民会議」を立ち上げ、国産材マークによる消費者へのPR活動も始めた。

森林組合系統では『国産材利用拡大と森林・林業再生運動』で、販売体制強化、施業共同化、技術者育成に取り組んでいる。関心を失いかけている組合員と320万人の小規模森林所有者を説得し森林施業共同化を進めていくことは容易ではないが、地域に設立された森林組合の宿命として市町村や関係者との連携をさらに強め英智を集めて成し遂げていきたい。1000年先に法隆寺を残していくために、今の時代に生きる私たちがやっておくべき責務である。

(全国森林組合連合会 代表理事専務 肱黒直次・ひじくろ なおじ)